

中津峡 (秩父郡大滝村)

# かわはく No.3

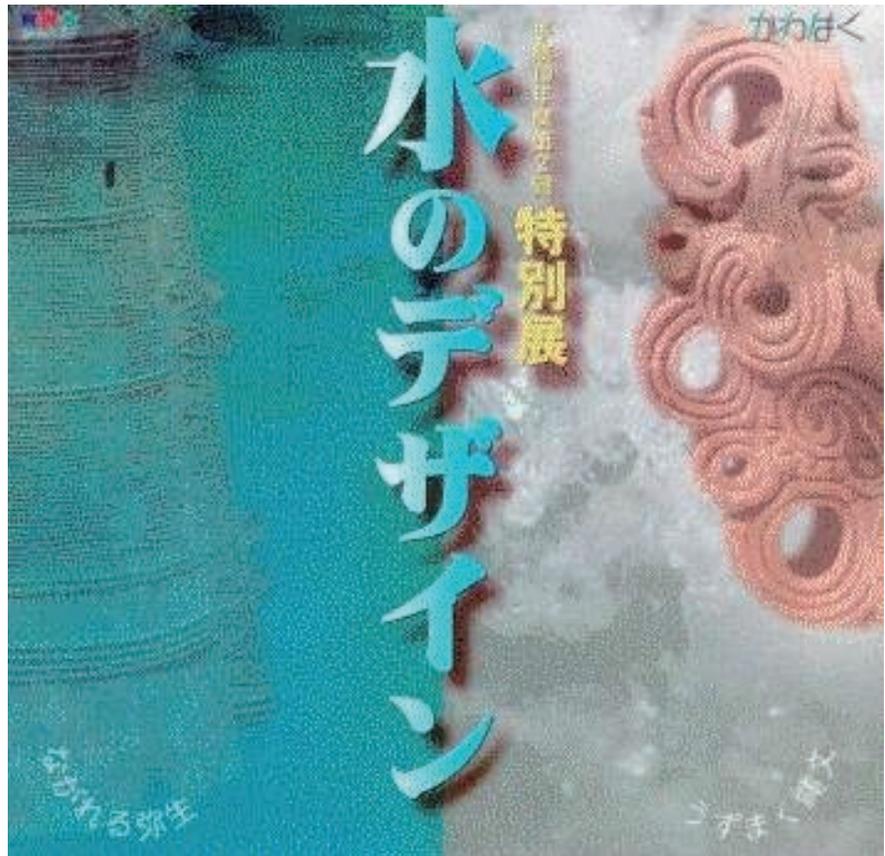
## CONTENTS

特別展「水のデザイン」	2
やって、試して、得するワークショップ	4
川をめぐることば一瀬と淵と一	5
身近な水紀行—三芳町こぶしの里—	6
かわはく日誌	7
教育普及活動のご案内 一楽しく、ためになる「かわはく」一	8



～特別展点描～

## 特別展 「水のデザイン」 開催記



特別展「水のデザイン」のポスター  
左「流水文銅鐸」/右「水煙渦巻文」の把手

### はじめに

平成10年10月24日～11月29日の期間、第2回特別展「水のデザイン」を開催した。副題は「うずまく縄文 ながれる弥生」である。語呂が良く、密かに気に入っている。

示構成は、縄文時代の水煙渦巻文把手付深鉢、弥生時代の流水文土器、流水文銅鐸などで、考古資料の中から「水の流れを感じさせる文様」が表現されたものをピックアップした。

私事で恐縮だが、今年4月に本博物館へ異動となり、「川の博物館」で初めての（と言っても平成9年8月オープン以来、特別展は常に初めてのものばかり）考古資料中心の、ちょっとひねった特別展の担当となってしまった。

### 「水のデザイン」ってほんと？

「弥生時代の流水文は水の流れを表現したものではない」という現在の研究現況に反旗を翻す度胸もなく、その根拠もない。当然智恵もない。近年、資料が増加している弥生時代の絵画資料の分析を通して、弥生時代に「流水文＝水の流れ」のような抽象的な表現方法が確立していたとは考えがたい（ただし、舟形注口土器に描かれた文様のようにそれらしきものは極まれにはある。）。

さらには、縄文時代の「水煙渦巻文」が、その名のとおり、とするのはもっと厳しい。滝壺の底からゴロゴロ発見されれば別だが。

結局、考古学者が「水」の文字を付けた2つの文様名称に全面的に頼らせていただいた。まさか命名した先生も、その名をメインテーマとした特別展を開催するとは思わなかったろう。

ただし、両者とも多くの候補の中から淘汰されて生き残った由緒正しき(?)名前である。また、流水文銅鐸を水の流れと断定した著名な考古学者もいるように、物の見方は人それぞれである。そこから考古学の研究は進むのだ。

## 「水煙渦巻文」とは？

「水煙渦巻文」は縄文時代中期後半(約4,000年前)、甲信、西関東地方に分布した「曾利式土器」に付けられた渦巻文で装飾される把手の名称である。前段階に流行した「井戸尻式土器」の把手の文様、あるいは東北南部の土器がその祖形と言われている。ただし、「水煙渦巻文」は曾利式土器出現段階の極めて限られた時期にしか認められず、その後、あっという間に把手は小さくなり、文様は簡素化される。

内輪の話で恐縮だが、展示に耐えうる「水煙渦巻文」を有する資料があまりにも少ないことに驚いた。日本中でも20個体はないと思う。標識資料である長野県曾利遺跡4号住出土資料が官製葉書のモデルとなった理由も頷ける。

## それでは「流水文」とは？

「流水文」は弥生時代中期を中心に主に奈良県、大阪府を中心に流行した文様であり、そこから各地に波及したと考えられている。今回の展示資料である兵庫県田能遺跡出土の流水文壺は、その胎土から大阪で製作されたものと言われている。

また、「流れない流水文」コーナーで展示した関東地方の流水文は、関西地方で盛行した流水文が東海地方を介して伝わったとされる。ただし、関西と関東ではその文様の描き方、盛行時期、出土量には大きな差がある。果たして「流水文」はどのような過程を経て関東地方にもたらされたのか。関東地方の流水文に関しての優れた分析は幾つかあるが、資料数が僅少でもあり、未解決な部分も多い。

流水文の出自については縄文時代晩期の文様である「工字文」から変化して成立したという説が有力である。「流水文=水の流れ」を否定する有力な根拠の一つである。しかし、縄文時代晩期からのスムーズな変遷過程は未だ説明しておらず、今後の資料蓄積が待たれる。

なにはさておき、何を表現したかは謎である流水文は、銅鐸、土器、木製容器、髪飾りなど、あらゆる素材に描かれている。弥生時代の一大ムーブメントであったことは確かである。

## 銅鐸に流れを描いたら…

本特別展関連事業として開催したワークショップ「銅鐸に流れを描こう ペーパークラフト銅鐸の製作」において、小学生の4～5人がピカチュウを銅鐸に描いていた。その中の一人は「川の流れを描く」という命題のとおり「波乗りピカチュウ銅鐸」を完成させた。現代の小学生に最も愛されるモチーフが判明した。

また、国立歴史民俗博物館で子供に銅鐸の絵柄を描かせた時と同様、大きな目玉を描く方が老若男女を問わず数人いた。「こ、これがいわゆる辟邪文銅鐸か!」と感動していたらその後、口や鼻が追加され、「お父さん銅鐸」や「おばあちゃん銅鐸」に変容してしまった。

## 再び「水のデザイン」とは？

今回の展示構成は、古い資料から新しい資料へ順番に並べる歴史的な展示ではなく、あくまで「水の流れを感じさせる文様」を主題とした、言ってみれば「見立て」の展示である。「かわはく」だからこそその特別展である。しかし考古学に興味のある方には物足りず、興味のない人には陳腐なものに写ったのではと危惧している。

言い訳をすると、特別展「水のデザイン」の主旨には、個人が持っている激流、清流のイメージを通して展示資料を観てもらい「水の流れに見えますか?」と問いかける、ちょっと無責任な目論みがあったのである。

とにかく、荒川のほとりに全国の水煙渦巻文、流水文が一堂に会してしまった。川のせせらぎの中で流水文を眺めるのもなかなかおつなものである。



玉川村 小川さん御一家



坂戸市 石川さん御夫妻

## ワークショップ 「銅鐸に流れを描こう」から

大人は四苦八苦しながら忠実に「流水文」を描く。子供が作ったものでは「ピカチュウ銅鐸」の他に「ハート銅鐸」、「お花畑銅鐸」、「怪獣銅鐸」、「パンダ銅鐸」などがあつた。中には「大水車銅鐸」、「カワシロウ銅鐸」など、かわはくゆかりのものもあつた。

(学芸員 佐藤康二)



～かわはくの展示から～

## やって、試して、得する ワークショップ

### はじめに

子どもたちが楽しみにしている場所の一つにワークショップという小さな部屋があります。ここは、他の展示室に比べ明るく黄色やオレンジ色や青色に塗られた機械があって、何となくワクワクするところです。



### 髪の毛くらいの太さの水？

髪の毛くらいの太さの水が勢いよく出る機械があります。その正体は、ウォータージェットカッターという機械です。この機械は、実際に工場でものを加工するために使われているものです。サーフィンや潜水をする人が着るウェットスーツの生地を切るときや自動車の座席のシートを切るときに使われています。

かわはく第1号を読まれた方は、「これ、なーんだ？」の記事の中にウォータージェットカッターのことが書かれていたので記憶に残っていることでしょうか。お見えになる方のお話では、「テレビでこんな機械があることは知っていたが、まさかこんなにすごいとは知らなかった。」と水の威力に感動される方が多いのは確かです。

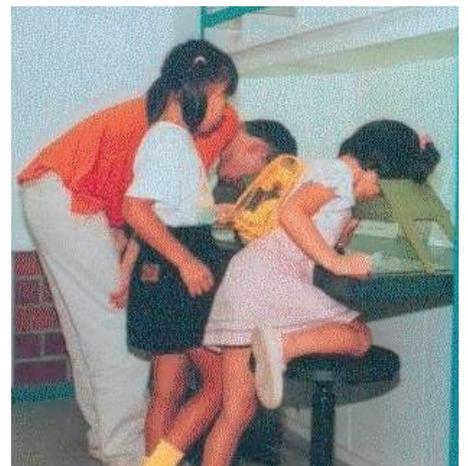
ちなみに現在使用している圧力の大きさは、2,800 気圧で、角砂糖の1つの面に普通乗用車が約3台載っているくらいの大きさです。

### 荒川を空からながめると

観察デスクコーナーにおいて航空写真の実体視をすることができます。

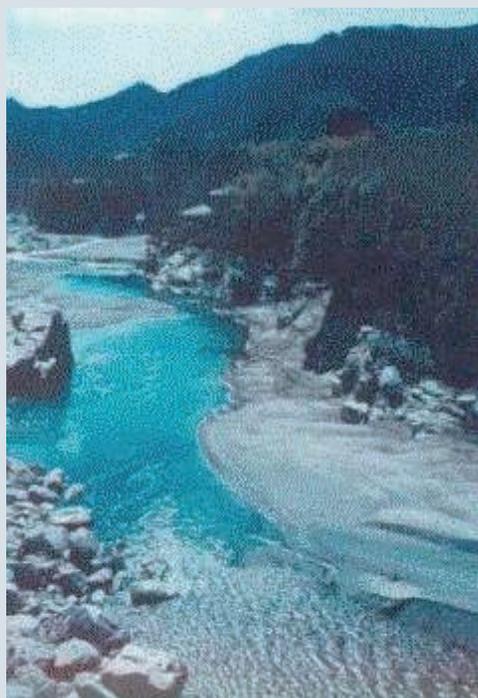
観察しようとする場所を撮影地点の異なる2枚の航空写真を並べて観察します。実体鏡という2つのレンズを通して写真をながめると立体的に観察できます。

現在は、荒川源流域の大滝村の入川（荒川源流）と滝川の合流点付近と、河岸段丘域と扇状地域の境である当館付近の2地点を観察することができます。源流域の地形は、山の起伏の激しさとV字谷地形を観察することができます。河岸段丘域の当館付近の地形は、段丘崖に広葉樹が繁茂していて、広葉樹林を境に3段から4段の階段状の地形を確認することができます。レンズのはたらきで、実際に観察するのに比べてやや誇張されていますが、荒川の上空をヘリコプターで飛んでながめたのと同じようにながめることができます。あなたも、一度ヘリコプターや気球に乗ったように上空から荒川周辺の地形をながめてみませんか。



写真は観察デスクで実体鏡を使って航空写真を観察しているようすです。

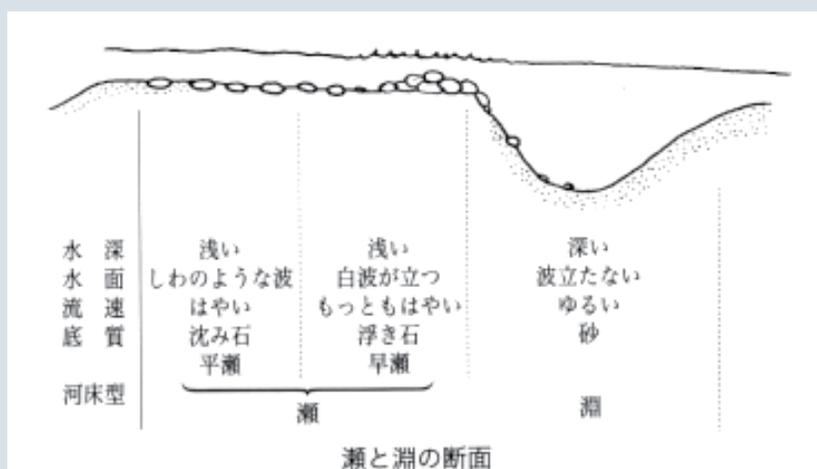
(主査 富田廣行)



曲がっているところに淵、その下流に平瀬、さらにその下流に波立っている早瀬が見られます。

## —瀬と淵と—

川を見てみると、流れの早いところや淀んだところがあります。水の流れ方は、流れが早くて白い波が立ち川底がはっきり見えないところ、流れは早いけど白波は立っておらず川底が見えるところ、流れが緩やかで深くて川底が見えるところがあります。



一般に、浅いところは「瀬」といい流れが早く、深いところは「淵」といって流れが緩やかになっています。流れの早いところは比較的大きな石が多く、淵では小石や砂、ときには泥がたまっています。

流れの早い瀬で、白波の立っているところを早瀬、白波の立っていないところを平瀬と呼んでいます。さらに詳しく観察すると、瀬は淵を出てすぐに少し波立ち、次に穏やかになり、淵に入る直前で強く波立っていることがあります。これらをそれぞれ、淵尻の早瀬、平瀬、淵上の早瀬と呼びます。淵にもいくつか形があります。流れの曲がる蛇行点にある淵は、中流域ではもっとも普通に見られるものです。全体の流れが真っ直ぐな場所に、巨大な岩や岩盤があるために、流れにえぐられてつくられた淵もあります。さらに、川底の固さが異なると軟らかい方が削られて淵ができます。滝壺は典型的な例で、上流域の淵の大半がこれです。

また、大きな淵では、下流部分に中程度の深さで流れがきわめてゆるい砂泥質の部分が広がっていることがあります。底生動物や魚の生息状態が上流部分とは明らかに違うので、この部分を淵から分けて、トロと呼ぶこともあります。

川を見てみると、川の蛇行と流れの蛇行が一致していて、淵と瀬が一組しかないようなところもあります。上流では、川の蛇行と流れの蛇行は一致せず、川が一つ蛇行する間にいくつもの瀬と淵が見られます。場合によっては、平瀬はほとんど見られないこともあります。逆に下流では、瀬と淵の違いははっきりしなくなります。たとえ違いが見られても早瀬の部分は短くなり、瀬全体が平瀬で占められるようになります。

一口で川と言っても、瀬と淵の作りや並びは様々です。川に出かけたら、瀬と淵をじっくり観察してみてください。

(主任学芸員 中村修美)



## 三芳町 こぶしの里

晩秋の趣のある10月29日、三芳町竹間沢にあるこぶしの里を訪れた。

東武東上線みずほ台駅西口に降り立つとその“都会”ぶりに一驚する。だがそれは目抜き通りだけで、すぐ脇道に入るとまだ平坦な畑が広がっている。20分ほどこの辺かなと歩いて行くと、竹間沢の集落の一角にふいに茅葺きの民家が現れる。立派だなーと回り込むと、そこは三芳町立歴史民俗資料館。

この資料館の常設展示では、《拓く》をテーマに武蔵野台地の開発を扱っている。特に三富新田開発や川越いもの生産などは、ここならではの展示である。屋外の茅葺きの民家は、幕末頃に建てられた旧池上家復元家屋。建坪が六十六坪（約217.8㎡）もある。入ると三和土の感触が心地よく、土間に切られた下いろりに薪がくべられ香しい。上がり端に腰掛け、持参のほうじ茶でしばし休憩。目的地のこぶしの里は、資料館の南東方向数分の所にある。



狭山丘陵に源を発し武蔵野台地を刻んで新河岸川に注ぐ柳瀬川の流域は都市化が進展しているが、段丘崖にはまだ所々斜面林と湧泉が残っている。この崖壁は、埜（ハケ）又はバツケと呼ばれる。三芳町竹間沢の埜では、西武台高校辺から北東方向750mにわたって斜面林がある。湧泉は数十カ所認められ、江戸時代にはせせらぎを集めて埜下に沿って山下用水が造られ水田を潤していた。三芳町が、斜面林と最も湧水量が多い湧泉を保全し、親水公園風に池・四阿・遊歩道を設けたのが「こぶしの里」である。かつての山下用水は自然石で護岸され、傍らにほぼ1kmにわたって散策道が整備され、「こどもの川」と命名されている。

パンフレットによると、毎年春には竹間沢の崖線をこぶしの花が白く咲き染め、崖線の下を水源とする3カ所の湧水が小さなせせらぎとなって池へと流れ込む、とある。そして、こぶしの花咲く3月と新緑の5月の写真が掲載されている。なるほど、春から初夏の頃がいいのか。来春女房と一緒に来てみよう。

この日はシルバー財団らしき老人2人が、落ち葉掃きをしており季節を感じさせてくれた。3カ所の湧泉は木柵があって入れないようになっているが、せせらぎの水量は豊富で、勢いよく清水が流れている。このせせらぎが、錦鯉が泳ぐ池を経てこどもの川となって埤下に沿って流れていく。散策道を歩いて行くと、右側の埋立地は倉庫群でコンクリート護岸となっている。やや興味が殺されるが、左側の斜面林内には湧泉が各所にあって池になっている所もあり、オシドリの夫婦やサギに出会い救われる。昼休みか、近所の社員風の人々がに座って川面を見ながら物思いに耽っている。三芳町はいい仕事をしたなーと思いながらたどっていくと、こぶしの里から離れるに従って空き缶やビニール袋などのゴミが目立ち始め、斜面林も荒れてくる。やはり、管理は大変なようだ。

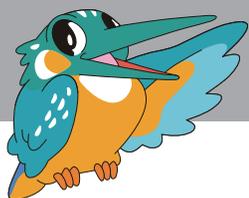
後日、「こぶしの里」の実現に尽力した三芳町教育委員会松本富雄氏に電話する。松本氏の話。「今年は多雨のおかげで水量が多い。以前の調査で、水質は酸性、農薬が若干認められているので飲むのはちょっと。こどもの川に最初ホタルの復活を考えたが、及ばなかった。落ち葉掃きは資料館主催の事業で行っていましたが、斜面林やこどもの川の管理はなかなか…。」

いや、こぶしの里の価値は、これから益々高まる。短時間であったが、いい水紀行だった。

\* 三芳町教育委員会発行のみよしほたる文庫2

犬井 正著『人と緑の文化誌』は好著。資料館で購入できる。

(副館長兼学芸部長 柿沼幹夫)



## ・・・ついに来館者 40 万人達成！・・・



30万人を迎えてから50日目の8月29日に40万人目を迎えることができました。

40万人目は、根岸雅人君（羽生市 小6）で「40万人目の来館者になってびっくりした」と感想を述べていただきました。夏は「かわはくが一番」だけあって、暑い日の来館者は飛び抜けて多く、たくさんの方に「かわはく」を体験していただきました。

当日は、開館1周年行事がリバーホールで行われました。また、川辺の交流イベント（3,118人参加）の日でもあり、夜遅くまでにぎわいました。

## 1 特別展

### ■ 第1回特別展 7月18日～8月30日 「川の旅びと・鮭」

「鮭のオースケがやってくる」（160人）

講演会「鮭の民族誌」（70人）

講師：大塚和義氏（国立民族学博物館教授）

### ■ 第2回特別展 10月24日～11月29日 「水のデザイン」

「銅鐸に流れを描こう」（64人）

講演会「水の流れと人」（79人）

講師：石野博信氏（徳島文理大学教授）

特別展の図録はコパンで取り扱っています

## 2 土曜おもしろ博物館

### ■ 音楽噴水にチャレンジ 9月12日（151人）

高野豊子先生にご指導いただきました。

### ■ 水車小屋で粉ひき 10月10日（53人）

講座室でこんにゃくを作りました。

### 3 シネマかわはく（映画会）

■第1回9月20日「那須疎水物語」他（168人）

■第2回10月18日「風ものがたり」（28人）

### 4 カワシロウ講座

■「川合玉堂の人と芸術」9月27日

講師：川合三男氏(47人)

家族から見た川合玉堂氏（講師の祖父）の人柄 と芸術に対する情熱を語っていただきました。

## ><> 野外教室 荒川を歩くⅠ <><



野上下郷石塔婆前にて

10月4日9時30分、寄居駅に集合した老若男女42名が荒川の秋を楽しみました。  
行く先々での解説に加え、玉淀ダムでは、事務所の方に説明していただきました。  
放水のごう音と水しぶきに包まれ、今秋の雨の多さを実感しました。

参加者からは、「いつ源流にいくのか」と声のでるほど好評でした。来年度も実施しますので、お楽しみに！

**ルート** 寄居駅（集合）－水天宮－玉淀河原－宗像

神社－極楽寺－玉淀ダム－末野神社－（右岸へ渡って）－野上下郷石塔婆－寛保洪水位磨崖標（解散）

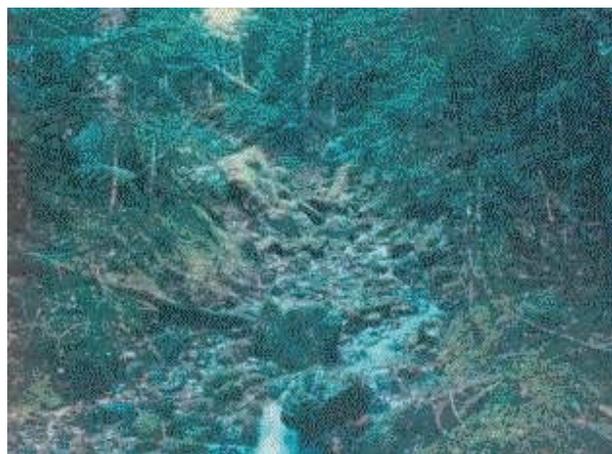
教育普及事業では、参加者も次第に増え常連参加者も現れるなど好評をいただいております。  
これからも「かわはく」ならではの多彩な事業を企画しますので、ご参加ください。

平成10年度第3回特別展

3月27日から5月5日まで

## 「甲・武・信源流物語」(仮称)

この特別展では、甲武信岳(標高2475m)に源流がある荒川・笛吹川・千曲川にスポットを当て、その源流域にすむ人々の暮らしぶりなどを紹介します。



### ■ 11月

#### 22日 カワシロウ講座「荒川の水生昆虫」

講師:大熊光治氏(県立北教育センター科学教育部長)

環境要素の変化に富む荒川を水生昆虫をとおして紹介

### ■ 12月

#### 12日 土曜おもしろ博物館「川辺の植物パウチッコ」

かわはく周辺の植物をパウチッコでパウッチします

#### 20日 シネマかわはく「続・あらかわ」

川筋に生きる様々な人々への取材から「川をたよりに生きる」しかない私たちの暮らしの原点をみつめる(80分)

### ■ 1月

#### 9日 土曜おもしろ博物館「溪流魚の」

イワナやヤマメなど溪流魚を紙を使って立体的に作る

#### 17日 シネマかわはく「ガンバとカワウソの冒険」

絶滅寸前のカワウソを通して環境問題を考える、愛と友情と勇気の物語(80分)

#### 24日 カワシロウ講座「荒川沿岸の人口推移」

講師:新井壽郎氏(埼玉大学名誉教授)

荒川沿岸の人口推移や構造を紹介し、地域社会の特徴を考える

### ■ 2月

#### 13日 土曜おもしろ博物館「川砂・海砂ミクロの発見」

砂の広場の砂を実体鏡で観察する

#### 21日 シネマかわはく「石を架ける」

九州を中心に石橋を訪ねて、その歴史や石橋誕生のエピソード、人々の託した夢、文化遺産的価値を描く(40分)

■ 3月

**13日 土曜おもしろ博物館「ポンポン船を走らせよう」**

懐かしいポンポン船を製作、ポンポン音が鳴るかな？

**21日 シネマかわはく「洪水をなだめた人々」**

治水を通して、自然と人間、自然と技術のあるべき関係を考える(30分)

**28日 カワシロウ講座「荒川流域の方言」**

講師：井上史雄氏(東京外国語大学教授)

県内の方言の違いを荒川の流れと関係づけて考える

！原則として、毎月第2土曜日は「土曜おもしろ博物館」・第3日曜日は「シネマかわはく（映画会）」、奇数月の第4日曜日は「カワシロウ講座」が開かれます。料金はどれも無料で、定員になりしだい締め切ります。

インターネットでも情報が紹介されています！

<http://www.kumagaya.or.jp/~kawahaku>

【お願い】

1. 行事は都合により変更になることもあります。
2. 〒のついた行事は、電話もしくは、F a xで実施月の1日からお申し込みください。
3. 川の情報もお寄せください。

■表紙の解説■

表紙の写真は、大滝村内を流れる中津川です。十文字峠に源を発して、大滝村落合で荒川に合流します。美しい渓谷で知られていて、特に初夏の新緑と秋の紅葉は格別です。

編集発行

さいたま川の博物館

〒369-1217 埼玉県大里郡寄居町大字小園39

TEL 0485-81-7333/FAX 0485-81-7332

1998年8月1日発行